

## かごしま農36景



### しらすの寿命

明治初期、日本に招かれて河川技術の導入・指導に当たったオランダ人は、川を前にして「これは河川ではない。滝だ」と驚愕したという。言うまでもなく、我が国はモンスーン温帯気候の影響を受け、殊に、梅雨期の集中豪雨や台風による大雨などからわかるように、ある時期に集中して降る。その上、狭い山国のため傾斜の大きい地形に影響される河川は、短かく急勾配。それだけに暴れまわり、始末が悪い。オランダからの技術者の一人で明治六年から三十年間滞日したデレーケは、日本の河川を丹念に歩いて調べ、大量の流送土砂の処理に心を砕き、上下流を一体に扱う水系一貫の治水思想を説いたという。この重要性は、九三年災害でも言えるのではないか。山間部での豪雨は、山崩れや上石流を発生させ、下流域まで被害を拡大した。緑の山は爪で搔きむしられたように白い肌が露出。一方、下流の田、畑は土砂で覆われた。

これを見た国の関係者は「しらす斜面への雨水の浸透や表面侵食を防ぐため、山腹をコンクリートなどで覆い固めるべきだ」と。さらに、痛々しい山肌を目の当たりにして不安でならないのか、「鹿児島の人のはのん気だ」と怒ったように言った。確かに、しらすは、雨水に遭うと角砂糖が水に溶けるように崩れる。しかし、九十度近いしらすの急崖は、容易に崩壊しない。むしろ、新しい崩壊は植生が進んでいる箇所で起こる場合が多く、しかも崩壊は剥れるように起こり、土砂の量は必ずしも多くない。こうしたしらすの性格を考え、コンクリートによる封じ込めに地元は首をかしげた。

鹿児島大学の岩松暉氏は、しらす斜面の崩壊は、風化深度がある一定の厚さになった斜面に、豪雨等の誘因が加わった時に発生するが、この風化層は三十五センチメートルから四十センチメートル形成されるのに、日本人の平均寿命に近い七十～八十年を要すると説明している。おもしろいではないか。しらす数十センチの寿命と人間のそれとが同じとは。これほどの寿命なら、しらすと付合う方がベターな気がする。自然にとってはコンクリートよりもしらすの方が馴む上、コンクリートには耐用年数があって危険が去るわけではないからだ。しらすとの付き合いには、崩落土砂の除去や山林の管理、安全点検などを欠かさないことが必要。日々の付き合いによりしらすの存在を忘れない。このことは、防災への最短の道であり、水系一貫の思想にも通じるのではないかと思う。

(1995年8月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:永正 重俊「今年を植える」第3回かごしまフォト農美展